

山の夕暮

涼しき山の中ほどに立てられたる此離れ家、そはおのが今年の夏の假住居なりしが、とまりあるも今宵を限にて、明日は再び塵の都に歸り行かんとす。二階の椽先に立ち出でて見れば、夕暮の空うすぐらくして物さびし、冷たき風のやゝ吹きそめぬと覺ゆる程に、あなたの谷間より一むらの霧たちのぼる、やがて廣がりゆく。遠き山々は見るく霧と暗とに包まれ、近き小山は影まだ淡くして、頂のみ僅にかくれ残りたるが、霧の海の離れ小島の如く、麓の里の燈火は、海人の小舟の火影かと見ゆ。

折々とひて共に遊びし我幼き友の家も、此海の底に隠れぬ。去年の夏この山里に來し時、始めて我はこの幼子と相知りつ。あひ知るやがて親しうなりつ。年は今年六つなりとぞ。おもちやの弓矢など持ちて、庭のあたり遊びありくべき程の齡なるを、あはれこの子は生れながらのあしなへにて、志かも人におぢ恐るゝ癖あれば、常々家の内にのみ隠れあて、知らぬ人になつく事は稀なりと聞きつるを、いかにしてか、我にはいととく馴れそめつ。我も何となくなつかしうなりぬ。今朝も小さき紙もて、船、かぶとなど造りやりたりき。嬉しがる其笑顔見て、我も亦嬉しかりき。されどあはれかゝるたぐひの彼が幼き樂しびいつまでかつゝかむ。十となり十二となり、十五六となりて、物の心知りそめたらん時の、彼が樂しびよ如何なるべ

き。彼が苦しびよ如何なるべき。今こそは母のもとにありて、何の心もなければと思ふ。

夕霧の海いや深うなりて、島と見えたる小さき山々も皆萎隠しつ。吹き渡る夜風も一入冷たうなれる心地す。

また來ん夏も、われこの山里に來べきや否や。此あはれなる友に、ふたゝび逢ふまでの我命ありや否や。

【入力者注】

底本に行をあわせるために、句読点のフォントサイズを小さくした箇所があります。

以下の修正を施しました（数字は底本の頁・行）。

25-5 彼か樂しびよ ↓ 彼が樂しびよ

底本・佐々木信綱編「竹柏園集第弐編」

明治三十五(1902)年五月廿七日発行

入力・小林 徹

公開・令和四(2022)年四月二十七日

最終更新日・令和四(2022)年九月十三日

橘糸重 [【散文作品集】](#) に戻る。